

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19401022
 研究課題名（和文）スワヒリ語圏における超民族語と諸民族語の相克と均衡
 —言語文化的動態の記述を通して
 研究課題名（英文）The Conflict and Balance of trans-Ethnic Languages and Ethnic Languages
 in Swahili-Speaking Countries - Through Descriptions of the Dynamics
 of Linguistic Culture.
 研究代表者
 米田 信子 (YONEDA NOBUKO)
 大阪大学・世界言語研究センター・准教授
 研究者番号：90352955

研究成果の概要（和文）：

本研究では「スワヒリ語圏」におけるスワヒリ語すなわち「超民族語」（民族を超えた共通語）と諸民族語の相互の影響を明らかにするために、東アフリカにおいてスワヒリ語と各民族語に関する社会言語学的調査および記述言語学的調査を行なった。スワヒリ語圏には異なるタイプの言語接触の状況が存在するが、各地域での調査結果を比較しつつ網羅的に言語状況を捉えたことにより、スワヒリ語圏の言語文化的な動態をより正確に記述することができたと思われる。

研究成果の概要（英文）：

In this project, we conducted sociolinguistic and descriptive- linguistic field work in Tanzania, Kenya and Uganda, in order to research the relationship and interaction between Swahili, which is the "trans-ethnic language" and local ethnic languages in the Swahili-speaking range. Different types of language contact can be observed in the Swahili-speaking range, and language situations differ from community to community. Our project, which has gathered and compared data from many different language communities in order to grasp the situation comprehensively, contributes a more accurate description of the dynamics of the sociolinguistic situation of the Swahili-speaking range.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2008年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
総計	12,800,000	3,840,000	16,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・言語学・言語学

キーワード：社会言語学，スワヒリ語圏，スワヒリ語，民族語，超民族語，アフリカ諸語，タンザニア，文法記述

1. 研究開始当初の背景

民族や国家を「越境する言語」すなわち「超民族語」・「超国家語」は、サハラ以南アフリカ地域にもウォロフ語やハウサ語などいくつか存在するが、なかでもスワヒリ語の勢力拡大は著しい。スワヒリ語は、本来東海岸地方の民族語として起源したのであるが、現在では、ケニア，タンザニア，ウガンダ，コンゴ，ルワンダ，ブルンジ，モザンビーク，ザンビア，ソマリア，コモロ諸島，マダガスカルなど 10 ヶ国以上にまたがって使用地域を確実に拡大している。このような超民族語の存在は、多民族・多言語状況が常態であるアフリカ大陸の将来的な言語地図を考察する上で極めて重要であり、この「越境」現象の実態調査は急務だと言える。「スワヒリ語圏」である上記の地域における言語状況の調査研究は、これまでも少なからず行なわれてきたが、それらは民族コミュニティや国の単位でのものが中心であった。したがって、スワヒリ語と諸民族語，標準スワヒリ語と諸方言，諸民族語間といったスワヒリ語圏に見られる異なるタイプの言語接触の状況をいずれも個別の現象として分析するにとどまり、「スワヒリ語圏」という単位での言語状況を検討するには至っていなかった。また、「スワヒリ語」として一括りにされている言語自体の多様性・重層性も明らかにはなっていなかった。そこで、「超民族語スワヒリ語」の実態と，超民族語が存在する言語圏の言語状

況をより正確に理解するために、「スワヒリ語圏」を網羅的に捉えた言語状況の調査研究が必要であると思われた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、多様な社会言語学的環境が考えられるスワヒリ語圏の各対象地域における社会言語学的調査および記述言語学的調査（スワヒリ語諸方言と民族語）をとおして、以下のことを明らかにすることである。

(1) スワヒリ語が周辺言語に与える言語的および社会学的影響

(2) 周辺言語がスワヒリ語に与える言語的および社会学的影響

(3) 超民族語としてのスワヒリ語の実態

(4) 一言語としてのスワヒリ語の重層性
さらに本研究は、スワヒリ語と周辺言語社会を言語文化の重層構造の中に位置づけ、教育や国民統合などの現代的な課題を、複雑な言語社会の特殊性との関連で解き明かすことを長期的な目標としている。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の整理

アフリカの言語状況に関する先行研究および関連するテーマの先行研究を整理し、調査・観察すべき項目を検討する。

(2) 現地調査

各研究分担者と研究協力者は、対象地域においてスワヒリ語の実態観察にとって適当な調査地点を広く踏査し、該当地において以下のような現地調査を行なった。

①民族語、スワヒリ語変種の記述調査

②言語態度と言語使用を中心とする各言語社会の社会言語学調査

②については、都市・農村、男女、世代などを考慮した。調査項目および調査方法については、基本的に同じ調査票を用い、必要に応じてそれぞれの地域・環境に即した独自の調査を行なった。調査を行なった主な地域は以下のとおりである。

タンザニア海岸部（ダルエスサラーム、タンガ、バガモヨ、キルワ、リンディ、ムトゥワラ）、島嶼部（ザンジバル、ペンバ）、内陸部（ビクトリア湖畔地域、キリマンジャロ山麓地域、マラウィ湖畔地域）、ケニア内陸部（ナイロビおよび周辺の都市・集落）、海岸部（モンバサ）、島嶼部（パテ、ラム）、インド洋海域（オマーン）。

(3) データ分析と検討

各メンバーが調査で得た成果を持ち寄り、それらの比較検討をし、言語越境現象およびマルチ・リンガリズムと関わる特殊と普遍の問題を整理する。

4. 研究成果

スワヒリ語圏における社会言語学的状況の解明を目指すべく、本プロジェクトの各メンバーがそれぞれの調査地において、スワヒリ語と民族語の関係、言語態度、言語使用等の社会言語学的影響の調査を行ない、スワヒリ語圏における言語接触およびその結果の多様性を明らかにした。またそれぞれの地域の民族語およびスワヒリ語の記述調査からは、明確な「言語取替え」が起きていないと言われている地域の言語にも様々な形でのスワヒリ語の影響が見られ、「危機言語」とみなされている諸言語だけでなく「安泰」とみなされている民族語の実態も明らかにな

った。

国外に目を向けてもアフリカ諸言語の研究は限られており、国際的な研究協力を進めていくことは、長年の課題であった。プロジェクトの最終年度には研究成果をアフリカやヨーロッパの学会で積極的に発表し（業績一覧を参照のこと）、本研究の成果発表とともに日本のアフリカ言語研究を国外へ紹介することに努めた。さらに、ロンドン大学主催のワークショップへの参加、ダルエスサラーム大学（タンザニア地域言語プロジェクト）とのワークショップ合同開催などを通して、アフリカ・ヨーロッパ諸国のアフリカ言語研究者たちとの研究交流を深める機会を持つことができた。これは今後本格的に展開していく国際的な研究協力の基礎となるものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

①米田信子, 「ヘレロ語における適用形構文と目的語の対称性」, 『アジア・アフリカの言語と言語学』, 査読有, 第4号, 2010, 5-37.

②米田信子, 「マテング語の動詞活用形と焦点」, 『スワヒリ&アフリカ研究』, 査読有, 第20号, 2009, 148-164.

③米田信子, 「言語を『選択する』ということーアフリカにおける母語教育と言語権について考えるー『Mwenge』, 査読無, 39号, 2009, 16-20.

④Shinagawa Daisuke, "Rare story of the emergence of the Future?: A hypothesis on the historical development of Proto-Bantu *-ag in Rwa (Bantu, E61)", Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration, 査

読有, 2, 2009, 137-150.

- ⑤ 米田信子, "Information Structure and Sentence Formation in Matengo." In: Manghyu Pak (ed.), *Current Issues in Unity and Diversity of Languages* (Collection of the paper selected from CIL18), Seoul: Linguistic Society of Korea, 査読無, 2009, 443-453.
- ⑥ 八尾紗奈子, 「チャガ語ヴンジョ方言のテンス・アスペクト・ムード標示について」, 『スワヒリ&アフリカ研究』, 査読有, 第20号, 2009, 87-107.
- ⑦ Komori Junko, "An Outline of Bantu Applicative Constructions: A Range of Semantic Roles of Applied Objects and their Properties", Tokusu K. (ed), *Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses.*, 査読有, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies., 2008, 113-135.
- ⑧ 中島久, 「スワヒリ語の文法と日本語との対照における若干の問題について」, 『スワヒリ&アフリカ研究』, 査読有, 第19号, 2008, 7-43.
- ⑨ Takemura Keiko, "Ripoti juu ya Utafiti wa Kiswahili wa 2007-2008 Nchini Tanzania - Msamiati na Sarufi ya Kichaani, Kaskazini ya Unguja -", 『スワヒリ&アフリカ研究』, 査読有, 第19号, 2008, 49-62.
- ⑩ 藤井千晶, 「預言者の医学による悪魔払いーザンジバルの事例から」『スワヒリ&アフリカ研究』, 査読有, 第19号, 2008, 70-82.
- ⑪ 米田信子, 「マテンゴ語の情報構造と語順」『言語研究』, 査読有, 133号, 2008, 107-132.

- ⑫ Shinagawa Daisuke, "Notes on the morphosyntactic bias of verbal constituents in Sheng texts", *Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration*, 査読有, 1(1), 2008, 153-171.

[学会発表] (計18件)

- ① 阿部優子, "Reducing an Unwritten Language to Writing: The case of Bende language", 1st International Conference on Heritage/Community Languages, 2010年2月20日, カリフォルニア大学ロサンジェルス校 (ロサンジェルス, USA).
- ② 米田信子, "Swahilization" of Ethnic Languages in Tanzania: The case of Matengo." 1st International Conference on Heritage/Community Languages, 2010年2月19日, カリフォルニア大学ロサンジェルス校 (ロサンジェルス, USA).
- ③ 竹村景子, "Kiswahili katika Kuunganisha Japani na Afrika ya Mashariki - Mfano kutoka Chuo Kikuu cha Osaka -", ケニア共和国スワヒリ語学会2009年度学術大会, 2009年8月27日, レナナハウス&コンファレンスセンター (ナイロビ, ケニア).
- ④ 米田信子, Object a/symmetry and animacy hierarchy in Herero. (Bantu, R31), *World Congress of African Linguistics 6*, 2009年8月19日, ケルン大学 (ケルン, ドイツ).
- ⑤ 阿部優子, "Causative in Bende (F.12)", *World Congress of African Linguistics 6*, 2009年8月18日, ケルン大学 (ケルン, ドイツ).
- ⑥ 米田信子, マテンゴ語におけるフォーカス標示と解釈の不一致, 関西言語学会第34回大会, 2009年6月6日, 神戸松蔭女子学

院大学 (神戸市).

- ⑦阿部優子, "The Continuum of Languages in West Tanzania Bantu: What is an "Intermediate Language"? A Case Study of Gongwe, Bende and Pimwe", A Geographical Typology of African Languages jointly with an international workshop on Khoisan Linguistics, 2009年5月12日, 東京外国語大学 (府中市).
- ⑧米田信子, "The conjoint / disjoint verb form and focus in Matengo.", 3rd International Conference on Bantu Languages, 2009年3月26日, 王立中央アフリカ博物館 (ブリュッセル, ベルギー).
- ⑨品川大輔, "Historical split of *-ag in Rwa (E61)", 3rd International Conference on Bantu Languages, 2009年3月26日, 王立中央アフリカ博物館 (ブリュッセル, ベルギー).
- ⑩品川大輔・米田信子, 「バントゥ諸語における適用形動詞の類型と目的語対称性」日本言語学会第137回大会, 2008年11月29日, 金沢大学 (金沢市).
- ⑪日野舜也, "The Importance of Cameroon Study on African Urban Studies.", The International Symposium of the Memory of the Late Eldridge Mohammadou & the Late Paul K. Eguchi, 2008年11月29日, ヤウンデ大学 (ヤウンデ, カメルーン).
- ⑫米田信子, "Information Structure and Sentence Formation in Matengo.", The 18th International Congress of Linguists, 2008年7月25日, 高麗大学 (ソウル, 韓国)
- ⑬米津昌知・Simon Peter, "Two Rituals Kifudu and Mchiriku among the Digo of Tanzania.", Ethnomusicology Symposium 2008, 2008年7月17日, ダルエスサラーム

ム大学 (ダルエスサラーム, タンザニア).

- ⑭米田信子, 「アフリカ諸語による教育と言語権 -母語教育のゆくえをのぞむ-」, 日本文化人類学会第42回研究大会, 2008年6月1日, 京都大学 (京都市).
- ⑮阿部優子, "The use of -ag- in Colloquial Standard Swahili in Tanzania", International Symposium "Corpus and Variation in Linguistic Description and Language Education", 2008年5月8日, 東京外国語大学 (府中市).
- ⑯米田信子, "Word Order and Information Structure in Matengo (N13)", Conference on Movement and Word Order, 2008年3月8日, ライデン大学 (ライデン, オランダ).
- ⑰米田信子, "Topical Hierarchy and Grammatical Agreement in Matengo (N13)", International conference on Bantu Languages", 2007年10月7日, ヨーテボリ大学 (ヨーテボリ, スウェーデン).
- ⑱阿部優子, "Clitics in Bende (F.12), their definition and functions", International conference on Bantu Languages, 2007年10月4日, ヨーテボリ大学 (ヨーテボリ, スウェーデン).

[図書] (計5件)

- ①竹村景子, 白水社, 『ニューエクスプレス スワヒリ語 (CD付)』, 2010年, 151ページ.
- ②Abe, Yuko 他, John Benjamins, *Corpus and Variation in Linguistic Description and Language Education*. (Kawaguchi et. al. eds.), 2009, pp.299-314.
- ③米田信子, 竹村景子, 小森淳子, 品川大輔, 神谷俊郎他, 三元社, 『アフリカのことばと社会』 (砂野幸稔・梶茂樹編), 2009年, pp.309-348, pp.385-418, pp.455-479, pp.481-517.

- ④小森淳子, 大阪大学出版会, 『世界の言語シリーズ1 スワヒリ語』, 2009年, 216ページ.
- ⑤日野舜也, 名古屋大学出版会『スワヒリ社会研究』(イスラーム圏アフリカ論集I, 嶋田義仁・中村亮編), 2007年, 507ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 久 (NAKAJIMA HISHASHI)

大阪大学・名誉教授

研究者番号: 00144543

(2007年度, 2008年度)

米田 信子 (YONEDA NOBUKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号: 90352955

(2009年度)

(2) 研究分担者

小森 淳子 (KOMORI JUNKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号: 10376824

竹村 景子 (TAKEMURA KEIKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号: 20252736

米田 信子 (YONEDA NOBUKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号: 90352955

(2008年度)

(3) 連携研究者

なし